

みづゑ第八十四號要目

興津の春(水彩畫原色版).....	故大下 藤次郎
ナ　　ボ　　リ(同).....	南　　薫　　造
水　　仙(同).....	眞野紀太郎
淺　間　神　社(同).....	赤城泰舒
水彩繪具の談.....	石川欽一郎
偉大なる畫とは何(四).....	矢代幸雄
アルブラバン古城(毛筆畫木版).....	丸山晚霞
飯坂と鹽原.....	故　　汀　　鷗
眞鶴崎より.....	三宅克己
バレット評判記.....	エス、キタヤマ
信濃高原の雪.....	茨木猪之吉
去年の日記.....	六　　郎
年賀繪ハガキの色々(寫眞版).....	北　山　紫　轡
全羅南道の朝鮮.....	一月の美術界
報告.....	寄書.....
報告.....	會告.....

『みづゑ』は故人の愛兒であつた、が慈愛深き親は兒を残して突然逝つた。『みづゑ』は果して育たう乎——誰も等しく案じた疑念である。けれども『みづゑ』も程なくハツになる、孤兒は孤兒でも無事に育つた孤兒である。さうして病身でもなければ至つて健に育たうかと思はれる、のみならず尠なからず世の中に同情を持つて居る愛くるしい兒である。將來は母の膝下で、多くの同情者によつて保護を受け父の素志を繼いで人に成らうと云ふ、私は此の健氣な一孤兒の爲にあらゆるものを犠牲にするを吝まぬのである。されば孤兒が前身を知るの士は父が生前より、より一層多くの同情を以て此の兒の生育を間接に直接に擁護せられむ事を望むのである。(S、K)